

1. 導入

動詞「教える」は、(1)に示すように主題が顕在的に表れないとき受領者/着点をニ格の他にヲ格で標示できる点で、日本語の二重目的語動詞としては例外的と言えるが、よく観察すると、(2)に見るように他の幾らかの動詞も同様の交替を示すことに気付く。

- (1) a. 太郎が (子供たちに) 英語を 教えた。 b. 太郎が 子供たちを (*英語を) 教えた。
 (2) a. 太郎が (花子に) 入会を {促した/説得した}。 b. 太郎が 花子を (*入会を) {促した/説得した}。

本稿の目的は、第1に(1)-(2)に見る交替現象に原理的説明を与えることであり、更には分析をゲルマン諸語の二重目的語構文へと拡張する。なお以下では、ニ格・ヲ格の交替を示す項を「被動者」と呼ぶ。

2. 先行研究とヲニ交替

意外にも(1a, b)間の交替に言及する文献は多くなく、それに原理的な説明を与えようとするものは殆ど見られない。しかし Motohashi (1989)のように、この交替を語彙が偶然に持つ性質のみに帰する見方には問題がある。「教える」類は単に例外として扱うには大きく、一定の生産性が認められるからである。また、英語の与格交替の分析を日本語へと拡張する試みは多く見られるが、それらは被動者が与格構文に相当する構造に於いてもニ格で標示されることを前提としており、(1)-(2)の(a)・(b)間の交替には何ら説明を与えない。つまり本質的な疑問は、「教える」類の動詞による格付与はどのように行われるのかという点に集約されるであろう。

3. 格付与特性と二重ヲ格制約

「教える」類の格付与特性を検討するために、同類の受動化に於ける振る舞いを見る。先ず(1)-(2)の(b)の構文は(3)のように問題無く受動化可能だが、ヲ格の吸収を伴う(a)の受動化は(4)に見るように語彙によっては幾分容認しにくい。一方、ニ格の吸収は、(5b)の適格性から一見可能なようだが、注意深く観察すると、対応するはずの能動文(5a)はそれに比べて若干悪いことに気付く。更に、(6)に見るように、(1a)の構文で DP 主題を取ることが不可能または困難な動詞にも、(5b)型の受動文の容認度が高いものがある。

- (3) 花子が 説得された。
 (4) a. ?進学が 花子に 説得された。 b. ?(花子の)進学が 説得された。
 (5) a. ?太郎が 花子に 進学を 説得した。 b. 花子が 進学を 説得された。
 (6) a. 太郎が 花子に {??入会を 誘った/*遅刻を叱った}。 b. 花子が {入会を 誘われた/遅刻を叱られた}。

この状況は、(5b)の構文が(2a)ではなく(2b)の受動化であるとすれば理解できる。つまり、「教える」類は、潜在的には被動者・主題の両方をヲ格で標示できるが、主題へのヲ格付与は、二重ヲ格制約により、被動者がヲ格を付与されない環境に限られるということである。だとすれば、可能な格付与パターンは(7)の2つである。

- (7) a. (<Patient>ニ) <Theme>ヲ 教え- b. <Patient>ヲ (<Theme>ヲ) 教え-

4. 分析

前節の議論に基づき、Harley (2002)、Holmberg et al. (2019)、Arad (1996)らに依拠して、本稿では二重目的語動詞一般に P_{HAVE} と機能主要部 Asp 及び Del の投射を含む VP 構造を仮定し、Chomsky (2007 以降)の素性継承を採用する。この仮定の下で、(1a)の構文には(8)の、(1b)の構文には(9)の構造を与えることができる。(8)・(9)の違いは、前者では Del が内在ニ格、Asp が構造ヲ格を担うのに対し、後者では P_{HAVE} が構造ヲ格、Asp が内在ヲ格を担う点である。

- (8) [DP_{Ag} [[DP_{Pat} [[DP_{Th} √教え-] [Asp uCase(Acc), uφ]] P_{HAVE}] [Del iCase(Dat), uφ]] [v]]
↑
Inheritance

- (9) [DP_{Ag} [[DP_{Pat} [[DP_{Th} √教え-] [Asp iCase(Acc), uφ]] [P_{HAVE} uCase(Acc), uφ]] Del] [v]]
↑
Inheritance

ここで(9)の構造は実際には実現不可能である。これは、P_{HAVE} が被動者を c 統御しないので両者は Agree 関係を結ばず、格素性が付値されないからであり、(1)-(2)の(b)に於ける主題生起の不可能性が導かれる。

一方、この問題は、主題が統語的に投射しなければ解消される。Maezawa (2020)に従い、姉妹関係にある2つの終端要素を1つの終端要素に融合する操作が存在するとすれば、これを循環的に適用することで、融合主要部√-Asp-P_{HAVE}は被動者をc統御するためである。これに対し、受動文に主題が生起可能なのは、外項の抑圧の結果、被動者はTによって主格を付与されるので、P_{HAVE} との位置関係は最早問題とならないからである。次節では、以上の分析をゲルマン語の二重目的語構文へ拡張し、項の移動可能性に於ける違いに説明を与える。

5. 二重目的語構文に於ける項の移動

5.1. 受動化

先ず二重目的語構文の受動化についての事実をまとめると、ゲルマン諸語は次の3つに分かれる: (A) 被動者と主題の何れも受動文主語となれる(ノルウェー語等)、(B) 主題だけが受動文主語となる(ドイツ語等)、(C) 被動者だけが受動文主語(アメリカ英語等)となる。本稿の分析の下では、この違いは当該言語が(17)・(18)何れのタイプの構造を許すかという違いに還元される。即ち、(A)類は日本語と同様両方の構造を許し、受動化によって構造対格が吸収された結果、(17)タイプでは主題、(18)タイプでは被動者が主語として繰り上がることになる。日本語との違いは、後者に於いて P_{HAVE} ではなく Del が構造対格素性を継承する点で、従って当該言語は二重ヲ格制約の対応物を欠き、能動文でも2通りの格付与パターンが実現する。これに対し、(B)・(C)類の二重目的語構文は1通りの構造しか許さず、前者では(8)タイプ、後者では(9)タイプのみが利用可能なため、それぞれ主題・被動者だけが受動文主語となる。

5.2. \bar{A} 移動

同様の不均一性は項の \bar{A} 移動についても見られ、英語の二重目的語構文では(10)のように主題のみが \bar{A} 移動可能なのに対し、ノルウェー語・ドイツ語では(11)のように被動者も問題なく \bar{A} 移動を受けられる。

(10) a. What did you give Mary?

b. *Who(m) did you give the book?

(11) a. [Hvilken bok]_{Th} ga du Jon_{Pat}? b. Hvem_{Pat} ga du boka_{Th}? (cf. Holmberg et al. (2019: 678))

英語とノルウェー語・ドイツ語の間のこの違いは、本稿の分析の下で格素性とその継承について幾つか提案を行うことで説明される。まず、(10)の英語の事実は、(i) 素性継承について(12)を採用し、かつ、(ii) 英語が内在対格を持たず、主題は被動者と同じく構造対格を付与されるとすれば、 \bar{A} 移動の反局所性とラベル付けに於ける主要部の振る舞いから導くことができる。

(12) a. A feature can be inherited to more than one head at once. b. Each feature can be inherited only once.

c. A Case feature is paired with a ϕ -feature so that they behave inseparably with respect to Feature Inheritance.

もし(10b)で被動者が A 移動と \bar{A} 移動の両方を受けるなら、その ν 位相の構造は(13)のようになるが、Erlewine (2017)の(14)に基づけばこの派生は排除される。被動者の上位2つのコピーが「近過ぎる」からである。

(13) [Wh_{Pat} [DP_{Ag} [ν [DelP [Wh_{Pat} [Del [PP Wh_{Pat} [P_{HAVE} AspP]]]]]]]]]]

(14) \bar{A} -movement of a phrase from the Specifier of XP must cross a maximal projection other than XP. (Erlewine (2017: 373))

問題を回避するには(13)の下線を引いたコピーの何れかが作られなければよいが、最上位コピーを作らない選択肢は連続循環移動の必要性から排除され、もう一方のコピーを作らない選択肢にも問題が伴う。Del が T や語根と同様に「弱い」なら、その指定部の欠如はラベル決定上の問題を引き起こす(Chomsky (2015))からである。この問題は、「主要部がラベルとなるのは値を欠く素性を担わない場合のみ」とする Mizuguchi (2017)の提案を採用すれば、 ν から Del へ ϕ 素性を継承しないことで避ける余地があるが、上述の(21)の下では、Asp への格素性の継承も起こらない結果を招き、主題が格を得られなくなる。従って派生を救済する方策は無く、(10b)の不適合性が導かれる。これに対し、主題の \bar{A} 移動は問題を生じない。Asp 指定部の主題のコピーは位相周縁部から十分に遠く、(14)の制約に違反しないからである。

一方、ノルウェー語やドイツ語は内在格を有するため、被動者の \bar{A} 移動は上述のような問題を引き起こさない。二重目的語構文が(8)・(9)何れのタイプの構造をとるにせよ、2つの項は一方が構造格、もう一方が内在格を担い、格付与が互いに独立しているからである。よって、(11b)は(11a)と同じく文法的となる。

6. 結語

以上では、「教える」類動詞の格付与特性に説明を与えることで(1)–(2)の交替を導出し、更に分析をゲルマン語の二重目的語構文へと拡張すれば、そこでの項の移動可能性が導かれることを示した。

主要参考文献 Arad, Maya (1996) “A Minimalist View of the Syntax-Lexical Semantics Interface,” *University of London Working Papers in Linguistics* 8, 215–242. / Erlewine, Michael Yoshitaka (2017) “Why the Null Complementizer Is Special in Complementizer-Trace Effects,” *A Pesky Set: Papers for David Pesetsky*, ed. by Claire Halpert, Hadas Kotek and Coppe van Urk, 371–380, MITPL, Cambridge, MA. / Harley, Heidi (2002) “Possession and the Double Object Construction,” *Linguistic Variation Yearbook* 2, 29–68. / Holmberg, Anders, Michelle Sheehan and Jenneke von der Wal (2019) “Movement from the Double Object Construction Is Not Fully Symmetrical,” *Linguistic Inquiry* 30, 677–721. / Maezawa, Hiroki (2020) “Word Order Alternations in English Comparative Constructions,” *Tokai English Studies* 2, 1–13. / Mizuguchi, Manabu (2017) “Labelability and Interpretability,” *Studies in Generative Grammar* 27.2, 327–365.